

活動完了報告

イタリアでのイタリアオペラの総合的実践と研修

丸山 貴大

≪報告および成果≫

今回の研修では、特に実技面において、著しい成果を見いだすことができたと思う。

1ヶ月に一度行われるアジマン氏とのマスタークラスにおいては、作品を深く理解するということを意識しながらもどのように指揮をすることで音楽的な構造を演奏者に明確に見せ、登場人物の心理やオーケストラパートに描かれた中身を伝えていくのかということに集中することができた。

特に最終月のフィガロの結婚では、自分はオーケストラ、歌手と共に二幕のフィナーレを演奏させていただいたが、アジマン氏の細やかな指導により、これまで自分が学んできたことがある一つの形にまとまったと実感している。

終演後、エージェントからも声をかけていただいたことから着実なステップアップができていると実感している。

若手のオペラ指揮者として良い基礎を築けているということが自分の自信になったことと、これから先も今まで積み重ねてきたような地味な勉強を重ねることで、より作品の核の部分を引き出せる指揮者を目指す。

フィレンツェではアッレマンディ氏の元で研修を行い、ヴェルディのレクイエム、ドニゼッティのランメルモールのルチアを指揮した。

特にヴェルディのレクイエムを指揮する中で、ヴェルディはイタリアオペラ指揮者としてたどり着くべき山であると感じた。やはりヴェルディはそれまでのイタリアオペラの作曲家の全てが反映されている作曲家であり、将来的にもっとヴェルディの作品を正統に演奏できるオペラ指揮者になっていきたいと強く感じた。

≪今後の課題≫

歌い手、オーケストラを相手に指揮をするとき自分の頭の中に確かな設計図を持つことは指揮者の中での必須事項であり、その設計図にさらに磨きをかけることは生涯の課題である。ただ、演奏は生物であるため、その設計図を持ちながらもその場のとっさの現場判断が最も必要なことであると今回実感した。その場の僅かなテンポ感や強弱の違いが演奏に大きな差をもたらすため即興的にその場で音楽をクリエイティブしていくという部分を今後は特に磨いていきたい。

今回のフィガロの結婚では最後に演出もつけての公演であったが、演出とのコラボレーションや、現場スタッフの関わり方など、指揮者という立場は最終的な現場監督であるため自分が把握できる範囲を拡げていきたいと思う。自分が責任を持つ公演を俯瞰して見れるようになるためにも、レチタティーヴォのさらなる勉強や、舞台上で起きることと音楽との共同作業について勉強していく。

指揮法の課題としてはオペラという演奏者の数がひととき大きな編成の中で、何を大事にするべきかという取捨選択の技術の向上、そしてそれを右手と左手を分離しながらわかりやすく伝えること。右手が単に拍を刻むだけでなく、歌とリンクをするような力強く滑らかな動きの

習得を目指す。さらにリハーサルの際に歌手に対して、より共感をしてもらえるような伝え方、喋り方、オーケストラの前に立ったときに無駄のない的確でとにかく具体的なリハーサル運び、それでいて音楽の喜びにあふれていることなど、リハーサル時の自分の在り方について研鑽を深める。